



# 共に生きる文化講座 映画からみる韓国文化 「でんげい」試写会

## プログラム

- ◎ 挨拶：  
「共生」からアジアの未来像を展望する  
坂井洋史（言語社会研究科長）
- ◎ 解説：  
『「共生」と「多様性」の道へ』
- ◎ 映画上映（97分）
- ◎ 感想と意見交換：  
「でんげい」に思うこと  
イ・ヨンスク（韓国学研究センター長）



**日時**：2017年4月14日（金）14時  
**場所**：一橋大学 東キャンパス  
第3研究館 3階 研究会議室



**入場無料** 提供：西ヶ原字幕社 / キノ・キネマ



## “地神パルキ” (지신밧기) とは？

大晦日。村の神木に龍旗を立て神を呼び入れる。赤い仮面を付け神木から譲り受けた白布を振り、悪疫邪気を祓う。神の力が宿った龍旗はその地を清め、神の使いは人々の幸福と五穀豊穡を祈り歌う。そして人々は太鼓を打ち鳴らし神に感謝する。

## イントロダクション

- ★〈文化のインターハイ〉と呼ばれる全国高等学校総合文化祭は、“伝統と創造が織りなす文化の祭典” (第40回/2016 ひろしま総文の大会概要より)。ここに12年連続で出場を果たした建国高等学校・伝統芸術部、略して「でんげい」のメンバーが汗と涙を流して全国大会に挑む姿を捉えた青春ドキュメンタリーが「でんげい」だ。
- ★本作は、2014年 (第38回いばらき総文) に参加したメンバー9人の物語。釜山MBCのプロデューサーであるチョン・ソンホ監督が、〈在日同胞〉の子どもたちの活動を本国の人々に知らせたいとして造られたTVドキュメンタリーを映画版に再編集、韓国でも公開された。
- ★日本では〈第11回大阪アジア映画祭2016〉特別招待作品としてプレミア上映、好評につき一般公開となった。
- ★チョン監督は、当初、日本の朝鮮学校を探したが、撮影が大変だという紆余曲折の末、建国高校に出会った。
- ★学校法人 白頭学院 建国幼・小・中・高等学校は、1946年創立の民族学校で2016年には創立70周年を迎える。在日韓国・朝鮮人の子弟に言葉と文化と歴史を学ばせたいとして作られた学校である。伝統芸術部は中・高等学校の生徒のクラブで、その実力は内外に知られている。(※映画の中では中学生も練習しており、正式には「建国中高等学校 伝統芸術部」であるが、総文は高校生のみ対象の祭典のため、中学生は参加できない。それでチラシなど建国高校伝統芸術部と表記している。)
- ★出場した9名は高1から高3までの女性7名、男性2名という布陣。生徒たちに特訓をする鬼のように怖くて情熱的なチャ・チョンデミ (車千代美) 先生。チャ先生は「自分たちの文化を知って初めて朝鮮人であることに誇りが持てた」という体験を語る。
- ★同じく毎年韓国から指導に来てくださるパク・ジョンチョル (朴正徹) 教授は「本国の子どもたちよりずっと情熱を感じるので教えがいがある」とおっしゃる。また「(日本の大会で) 韓国文化を見せることにより韓国への違うイメージを持つ契機になります」とその意義を語られる。
- ★劇中に使われた挿入歌は「HOPE」 (作詞・作曲・歌 ユンナ/윤하)。彼女は日本でも活動歴があり、韓日をつなぐ本作に相応しい曲と言えよう。

## ★チョン・ソンホ (全聖鎬) 監督 プロフィール

1997年から現在まで、釜山MBCプロデューサーとして在職中。

2008年、ドキュメンタリー「村の子供たち 希望を演奏する」

\* アルジャジーラ フィルムフェスティバル 本選進出

2015年 ドキュメンタリー「でんげい」 (原題「いばらきの夏」)

\* 第10回釜山国際児童青少年映画祭招待作 (2015)

\* 第11回チェヨン (堤川) 国際音楽映画祭招待作 (2015)

\* 第7回DMZ国際ドキュメンタリー映画祭招待作 (2015)

\* 第11回大阪アジア映画祭招待作 (2016・3月)

\* 第4回ディアスポラ映画祭 (仁川) 招待作 (2016・9月)



## ★監督のメッセージ

世の中で生きてみれば、人と人との間に縁というものがあると感ずます。良い縁もあれば、悪いのもあります。初めて出会ったときは、それが縁なのか、それともすれ違っただけなのかわかりません。

建国高校伝統芸術部の子ども (生徒) たちとの出会いも、最初は、こんなに大切な縁として繋がるとは思いませんでした。

子どもたちを撮影しながら、むしろ私が感じ学ぶことの連続だったと強く思っています。

それは、この子どもたちの大切な物語を韓国の(TV)視聴者たちにきちんと伝えなければならないという義務感になり、また別の意味で、韓国の子どもたちに彼らの物語をうまく伝達できるだろうかという悩みになりました。TV放映後、再編集して劇場用映画として生まれ変わり、2015年8月に韓国の観客と出会いました。

封切り日、建国高校の子どもたちが韓国に来て、上映後のパフォーマンスを準備しました。公演後、観客は10分間のスタンディングオベーションで子どもたちを迎えてくれました。ところで、この公演は映画の興行のためというより、私個人が彼らに再会出来るという喜びから招いたものでした。

このように結ばれた子どもたちとの縁は、さらに日本にまで繋がったようです。日本の中のマイノリティである在日韓国人の物語に関心を持って下さる方々の助けで日本公開が実現しました。

日本の観客はこの物語をどのように受け止めて下さるだろうか、たいへん気になります。それでいて、11月にまた、あの子どもたちに会えると思うと胸がときめきます。

3月の大阪アジア映画祭で三たび会ったときの彼らの輝く瞳を忘れることができません。初めて私に向けて見せてくれた子どもたちの信頼がこもった瞳の輝きでした。11月、子どもたちとの縁は続くでしょうし、また別の縁が生まれることを期待しています。

ありがとうございます。

チョン・ソンホ (2016年7月28日)